

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可
平成22年8月1日発行（毎月一回一日発行）
俳句雑誌 沖 第41巻第8号

沖

俳句雑誌[おき]

8月号

沖 発行所

射位

能村 研三

熱い夏

桜桃忌スタンダードバーの小半時

悔しくてししむら叩く泳者かな

射位に立つ衣擦れの音夏袴

江戸図絵の橋の名にある涼気かな

今秋、十月「沖」はいよいよ創刊四十周年を迎える。増大号となる十月号の編集は千田百里編集長のもとに編集部 皆さんが目下懸命なご尽力のもとに進行している。また記念大会についても、遠藤真砂明実行委員長のもとに委員の皆さんがいろいろなセクションに別れて準備を進めている。ありがたいことである。

私の方も、四十周年という大きな節目に向けて準備も忙しくなってきました。その一つが『能村登四郎全句集』の刊行で、刊行委員の皆さんのご尽力で、刊行までの詰めの作業を行っており、私も先日千田敬さんと共に、出版社に向いて、装丁のデザインを含めた最後の調整をしてきた。刊行は九月の末になると思うが、能村登四郎の全句業を継げたものなので、広く多くの人に見ていただきたいと思っています。

また、四十周年と登四郎の生誕百年を記念して市川市の文学プラザにおいて十月の終りから一月にかけて「登四郎展」を企画している。これについての企画作業も私が中心となって進めることになり、その準備にとりかかった。

偏照りの後の偏降り実梅濃し

井上ひさし氏

まつぶさな仕事を つんで 半夏雨

職人の朝の段取り 梅雨晴間

火を入れて 鍋高返す 半夏生

ころの理で 石を動かす 雲の峰

背に挿して 昂ぶる 祭団扇かな

それに、私の句集も平成十五年に『滑翔』を刊行以来、七年が経過しているので、この夏に平成十五年から十八年までの作品を集めて第六句集を刊行することにして、先日原稿を出版社に送った。

それに加えて、四十周年に参集いただく方全員に私の直筆の短冊を差し上げることにしたので、その揮毫もこの夏の大きな仕事である。

先師登四郎も、四十年前の夏には、十月の創刊に向けて「熱い夏」を送ったが、私にとっても今年の夏はさらに「熱い夏」になりそうだ。

能村 研三



蒼茫集



船のごとく

田所節子

田水張り船のごとくに一軒家
朴花忌千の誌友へ宛名貼る
白藤の齡の翳を思ひをり
サングラスひとりぼつちになりたくて
岩一つ雷鳥となり歩みだす
青梅雨のもうゆかりなき本籍地

虹の根に

千田百里

短夜や絵巻はころがして開く
半巻の簾は母の居るしるし
父の日や物思ふかほ暇な顔
誕生日無職無宗派にて涼し
青葉籠りや舌頭に十七字
虹の根に触れてみたくて歩き出す

黒潮

遠藤真砂明

黒潮の直行に夏来たりけり
舵切つて夕風富士を傾かす
押さへたる波の弾力箱眼鏡
竹皮を脱ぎしばかりの勇み立ち
木漏れ日に瑠璃一瞬の蜥蜴の子
大空の青きしじまの朴花忌

大樹

辻直美

母の日の子が祝はれてあたりけり
旧居かの墓ともどもに失せたるよ
噴水のはじまりの息をはる息
残されて籠枕さへ捨てられず
汗の子が鬼を逃るる大樹かな
五月美し父の忌修し子ら帰る

水のカーテン 菅谷たけし

むくむくと雑木の緑むくむくと
若布干す小さき斜面を使ひきり
菰巻きに今日を仕舞へる若布干し
風に開く水のカーテン作り滝
登四郎忌ほたるぶくろの中濡れず
風に浮き風へ切り込む夏燕

夏 掛 大畑善昭

鳥どちの子育て吾は木を育て
夏掛のその夜の夢に人多し
猿梨の花胸中に山気満ち
匆忙やひそかに太りゐるすぐり
きのふけふよく飛ぶ翁草の絮
稲育つ水のたひらを雲が行き

遠出せむ 田辺博充

麻酔さめ確とこの世の水中花
手術室夏の海底かと思ふ

遠出せむ快癒後アロハシャツを着て
草に頼くすぐられ覚む三尺寝
この夏の少雨を樹医と憂ひけり
重量感ある波ばかり海開き

点 描 秋葉雅治

勢ひ音のあとに忍び音祭笛
百人の千鳥足めく神輿かな
うすものや森林浴に裸して
父の日といふ脇役の出番かな
打水の風が振り撒く点描画
帰省子にますます低くなる鴨居

聖五月 松本圭司

鶴帰る月日の果てるところまで
聖五月点滴一滴づつひかる
胃取られても心取られず暑に對ふ
日蔭より少しはみ出し金魚売
疲れてはこつてりと煮る馬面剥
待つといふことにも馴れて夕端居

桐の花 鈴木良戈

大川のうねり強まる五月場所
あめんぼう水面の雲と遊びをり
釣堀や隣の魚籠の魚跳ねて
今年また朴の大輪登四郎忌
父母は夢にのみにて桐の花

古紙 上谷昌憲

電波の日昨日の夕刊今朝は古紙
登四郎忌近づく雨の沙羅の花
青鷺の一步進みて日暮れけり
杉箸のほどよき湿り祭鱧
着陸す夏かげろふを押し潰し

つばめ魚 中尾杏子

佳き文と狭山の新茶届きけり
水飲んでみどり濃き真夜生きるとは
夕ぐれの香りあつめて花蜜柑
黒鍵二つ沈みしままや宵螢

つばめ魚飛ぶ月明の波うねり

男の旅 河口仁志

人去りし夜の静寂の茅の輪かな
菖蒲湯に浮かべアヒルと軍艦と
土地人の筑波嶺びいき夏来る
自治会の満場一致熱帯夜
炎天に男の旅は怯むなし

自在 溯上千津

杖の先自在に使ふ単衣きて
母在さば露の干ぬ間の葉狩
額咲くや悔は打ち身の色となり
種牛五頭生きのび卯の花月夜かな
家畜らの万霊のぼる夏銀河

緑さす 北川英子

緑さすベッドに一礼退院す
螢ぶくろよりおづおづと外気かな
晩年や雨後の薄日に藻が咲きて

縦走のなほも高みへ雲の峰
「イトカワ」へ三億キロの星合よ

空 港 湯 橋 喜 美

庭園は花椎が占めいま雄どき
玉葱の生食に朝始まれり
曙の森洗はれてほととぎす
木洩日が好きで梅雨蝶庭出です
空港へ直通列車茅花飛ぶ

余り苗 酒本八重

余り苗身を寄せ合うて水通す
葱坊主村に大将居なくなる
ちよつといい話が洩るる新茶かな
抱き籠をひよいとかがかへて階下る
松柏のあはひひそかに花菫
風鈴に加ふ南部の重さかな

祭 来 る 柴 田 雪 路

藍染の幟干されて祭来る

雨の矢に根付く気負ひの余り苗
甚平や自慢話は聞き流す
滑走路を捲き南風のゆきどころ
逡巡のわれに瞬く梅雨の星

姫 螢 羽根嘉津

茅花流し三河連山深曇り
雲割れて朴は祈りの蕾立つ
父の日の杉の氣息を貰ひたし
忌の後の出逢ひさながら姫螢
ことさらに風の翳りの白菖蒲
気圧の谷近づく匂ひ栗の花

蝮 瓶 池 田 崇

付け足のやうな気がして父の日は
日雷小さなぼやき二つ三つ
一匹が癩の種なり蠅叩
ひんやりと土間の匂へり蝮瓶
夕焼を見て絵心の湧きをりし

潮鳴集

喫水線

細川洋子

にんげんに喫水線や籐寝椅子
そらまめの真綿湿りの莢の中
螢火の反転すれば強からめ
緑さす二畳半なるわが書齋
古書店の屋根裏鎖してゐる薄暑

魚凶鑑

鳥居秀雄

キヤラメルに天使の意匠聖五月
瞬かぬ木偶の目ぬぐひ暮の春
蒼天に桐咲き満ちて父の恩
時の日の早送りするチャップリン
魚凶鑑書架に戻して更衣

祈り

頓所友枝

ゆりかもめ二重扉の開き夏
白薔薇の散りて夜道の標めく
立ち止まる時を許さずはたた神
病む人にやさしさ貫ふ緑雨かな
静謐な祈りとなりて滴りぬ

騎士

古屋元

放課後のプール青空の一頁
花束に小さな騎士ナイトてんと虫
蟻の列無声映画の焦士かな
単線にねむる日焼子ラストシーン
森の静けさ冷房の史料館

沖作品



麦の秋平面図には夢がある

市川市

佐野ときは

万緑や水道管は家つなく

夏に入る駅舎や海の写真展

朝の日に軍手かがやく溝俊へ

居酒屋の主梅干す昼の顔

縄電車先頭の子の紙兜

神奈川県

福島 茂

麦畑ざらつとしたる顔洗ふ

青蒿のひゆるひゆる伸びて反抗期

桑の実の熟れポケットにある記憶

腹這ひが仕事の形箱眼鏡

校庭の暮れ残りたる花水木

目に痛き立夏の湖の入り日かな

パントマイムの見えぬもの追ふ麦の秋

田水張り湧き出づ風の柔らかし

千葉県

峰 幸子

能村研三選

大噴水リズムに狂ひなかりけり

棕櫚の花わたし体育会系で

満を持すとは早苗田の静けさか

梅雨籠りして紅茶葉のジャンピング

道草がしたくここまで姫女苑

図書館に深海魚のごと梅雨さ中

さへづるに似たる異国語麦の秋

木の花の白を尽せる六月来

両の手で蛇の丈言ふ垣根ごし

飛花落花ばかんとカップ酒あけて

山笑ふかつて線路の眼鏡橋

さりげなく言へるは力へちま蔓

托僧は留学生なり若葉冷

窯壁の奥なる色や若葉して

市川市

七田 文字

荒井千瑳子

和田 満水

沖作品 15句選評

*
能村研 氏

麦の秋平面図には夢がある

佐野ときは

この句「平面図」でなくて「未来図」であつたらどうであろう。「夢」だと余りにもつき過ぎて当り前になつてしまふが、「平面図」と言う言葉がこの句を活かした。「未来図」であれば生活の場面の将来設計にも使われ、必ずしも建築学的な場面とは限らない。その半面「平面図」は、建築学的な意味あいを濃くした言葉である。建築学的に言えば「建築物を水平方向に切つて真上から見た図」ということになるが、各種の図面の中でも一番基本となるもので、この図があれば人間の想像力によつてある程度の形が再現できる。例えば家屋の改造などでは、今の状況がスペース的にも使い勝手も大きく改善されることが一目でわかり、いろいろと「夢」が膨らんでくる。

青蔦のひゆるひゆる伸びて反抗期

福島

茂

青蔦は常緑性と落葉性があるが、落葉性のものは初夏から茂

り始めて、新葉は赤みを帯びて光沢があつて美しい。繁殖力が盛んで、瞬く間に木々の幹に絡みついたり、建造物や塀を被つて茂る緑は美しい。人間には幼児期の「第一反抗期」と思春期になつてからの「第二反抗期」があるが、自我が芽生えて自己主張をすることによるものである。青蔦の生長具合も自然の中ではある意味の反抗期となるのかも知れない。

パントマイムの見えぬもの追ふ麦の秋

峰 幸子

パントマイムは大道芸として行われているようだが、実際には無い壁や扉、階段、エスカレーター、ロープ、風船などがあつたかもその場に存在するかのようになり振り手振りのパフォーマンスで表現する。「壁に手を置く」を水草や、相手の目線には絶対見えないものを、「広くて高い壁」があるように表現する技術である。小手先の技術だけでなく、体全体で感じさせるのである。麦の秋は明るい初夏の大景を想像させる季語だが、この季語からそのパントマイムの無限に伸びる表現力というものを感じた。

棕櫚の花わたし体育会系で

七田 文子

棕櫚は南国情緒をたたえて、その姿は公園樹や庭木としても人氣が高い。頂は二階の軒先にかかる高さだ。毎年四月の中旬から下旬にかけて、葉の間に黄色い包に包まれた大型の花序を出す。それから様子の変化はなかなか面白く、また黄色い巨大な花穂が何本も並んで垂れ下がる景観は大いに人の目を楽しませてくれる。存在感のある花で、野生的で自然の中にも溶け込みやすい所から体育会系という言葉をイメージさせたのだろう。七田さんも明るく向日的な感じがする方で体育会系を自認されるのはよくわかるが理知的な面も持ち備えた方のようにだ。(以下略)